

イチイのさし木

—さし穂の長さとう葉量の違いによる発根の差異—

佐藤孝夫

イチイ(オンコ)は北海道の緑化樹としてはかかせないものであり、また造林樹種として植えられているところもある。イチイの増殖は、実生による方法とさし木による方法があり、実生については光珠内季報 25号(斎藤)、さし木は同じく 9号(斎藤)、21号(斎藤)、23号(吉川)ですでに報告してある。これらの報告ではさし木の場合、長さ 15cm、総枝葉の 1/3 ほどを取り除いたさし穂を用いてあるが、今回はさし穂の長さを変えた場合の発根率はどうか、長いさし穂でも発根するのか、また、葉の量によって発根率、発根量にどのような差が生じるかを検討してみた。

材料および方法

さし穂は当場の緑化樹見本園内のイチイ(約 10 年生・樹高約 1.2m)の 1 年生枝を用いた。さし穂の長さは、1 年生枝の伸長量によって 10cm、20cm、30cm、40cm に分けた。また、20~30cm に伸びた 1 年生枝の下部を 10cm の長さに切断し、これもさし穂とした(以下 10cm(切)とする)。各さし穂の切口基部は斜めに切断した。さし穂の葉量は、各穂長の 1/2 の長さの葉を残したもの(葉量 1/2)、1/4 の長さを残したもの(葉量 1/4)の二通りとし、側枝はすべてとり除いた。さし付け本数はそれぞれ 20 本ずつとしたが、40cm の穂長のものは各 10 本とした。各さし穂の状況は表に示した。

表 さし穂の状況

		10cm	10cm(切)	20cm	30cm	40cm
平均 葉数(枚)	葉量 1/2	29.5	17.7	52.1	65.1	77.6
	葉量 1/4	22.0	8.2	34.6	45.1	50.1
根元径(mm)		3	4	3.5	4	5
平均さし付け深(cm)		4	4	4.5	4.5	5

さし木用土は 5mm のふるいにかけた火山砂を用いた。さし木床は硬質塩化ビニール製の育苗箱(45cm×35cm×10cm)を用いて、底面に通気性を良くするため火山礫を 2cm ほど入れ、その上に用土を 7cm の厚さに入れた。さし付けは 1978 年 10 月 24 日におこない、温室内で透

明ビニールでおおって密閉し、2週間に1回程度灌水をおこなった。約5ヵ月後からはビニールをはずし、それにともなって2~3日に1回の割合で灌水をおこない、約7ヶ月経過した1979年5月16日に発根状況を調査した。なお、その期間中のビニール内の最高気温は43℃、最低は5.5℃であった。

試験結果

穂長別、葉量別の発根率を図-1に示した。穂長10cm、10cm(切)ともに、葉量1/2では100%、葉量1/4では90%で同じ発根率であった。図-1から明らかなように、穂長20cmの時が最も良い発根率を示しており、それ以上になると発根率は低下するが、特に葉量1/2の方が減少割合が大きかった。しかし40cmのさし穂でも葉量1/2で80%、葉量1/4で90%と、高い発根率があった。

さし穂1本当たりの平均発根数および最大の発根長の平均を図-2に示した。全体にさし穂が長い程、発根数および最大の発根長は大きくなる傾向が見られた。そして、両方とも葉量1/2の方が葉量1/4のものを上まわっていて、さし穂長が同じ場合、葉量が多い方が発根数は多く、最大の発根長は長かった。

さし穂の長さとして、1本当たりの根および葉の平均乾重量との関係を図-3に示した。1本当たりの根の平均乾重量は、さし穂が長くなるほど増加し、また、葉量1/2の方が葉量1/4のものよりも多かった。根の平均乾重量は葉のそれに比較して少なかったが、根と葉の平均乾重量の間には、高い相関が見られ、葉の量が多いほど、発根量も多いことが認められた。

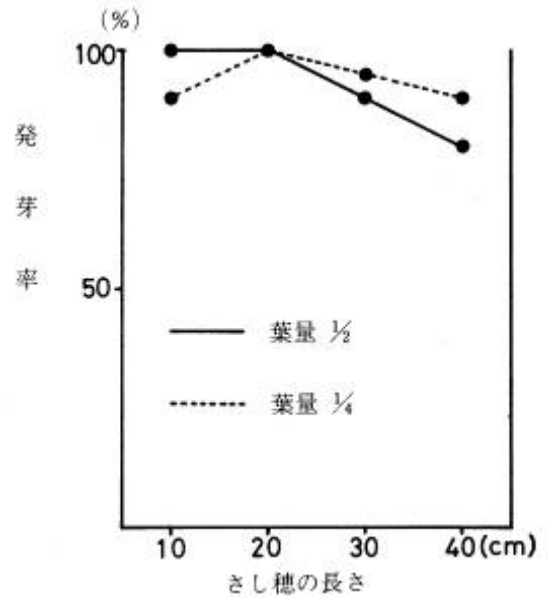


図-1 発根率

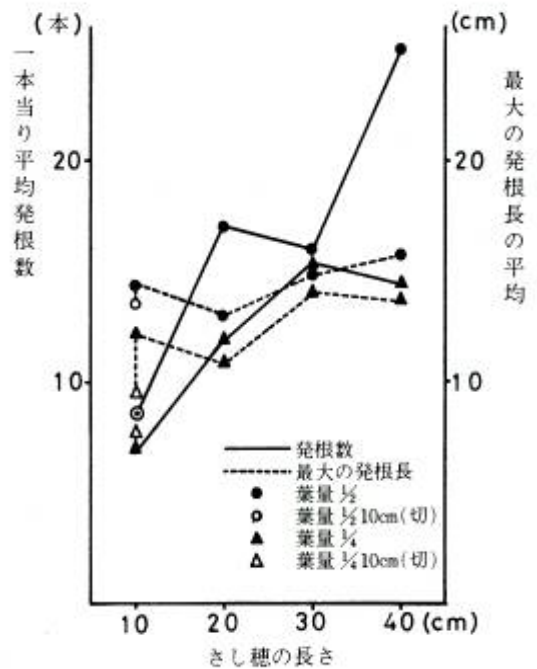


図-2 一本当たりの平均発根率と最大発根長の平均

イチイのさし木は密閉法でおこなうと高い発根率が期待できるが、今回の試験ではさし穂の

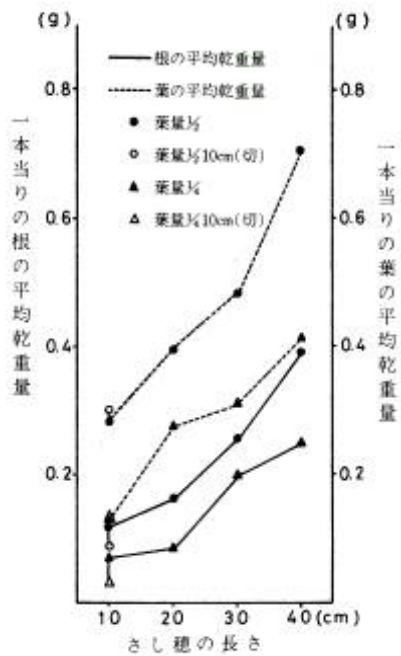


図-3 一本当りの根の平均乾重量と葉の平均乾重量

長さが 20cm 前後の場合に最も良い発根率を示すことが認められた。しかし、現在苗畑で育成中のイチイのさし木苗（5年生）の1年間の平均伸長量を測定したところ約 8cm であったことと、40cm のさし穂でも 80～90% の発根率であることを考えれば、長いさし穂を使用した方が有利であると考えられる。また、葉量の多い方が発根量は増加する傾向にある。したがって、さし穂の葉はなるべく残した方が良いが、穂長が長くなればおよそ 1/3～1/2 程度の葉は取り除いた方が良いと思われる。

(樹芸樹木科)